

病理学図譜

Atlas der pathologischen Anatomie = 日本版

W. Doerr, G. Schumann and G. Ule 著

慶応義塾大学病理学教室 訳

広島大学教授

飯 島 宗 一

この図譜は、ハイデルベルグ大学病理学教授 W. Doerr が中心となって編集した「Atlas der pathologischen Anatomie (Georg Thieme 社刊, スツツガルト, 1975)」の日本版で、邦訳は影山圭三教授他の慶応大学病理学教室の諸君によって行なわれた。322ページ、874のカラー図版を収める総アート紙の大冊で、この種の図譜としては内容体裁とも、もっとも充実したもののひとつである。

病理学図譜の目的と効用をどのように考えるかは意外にむずかしい問題であるが、原著者は、「図譜というものはその利用者に助言を与えようとするものである。利用者が本質的なものと非本質的なものを区別することを助けようとするものである。図譜は利用者に観察することを経て熟視にまで達せしめるために「見ること」を教えようとしている」とのべている。これは形態学の根本

にかかわるひとつの見識であるといえよう。この見識を図の選択と配列を通して現実の図譜に結晶せしめることは至難の業であるが、この図譜について敬服すべき点はとにかくにもこの見識を全巻につらぬく努力を惜しんでいないことである。そしてその努力は、たんに編集の過程のみにかかわる事柄ではなくて、日常の病理解剖、病理組織学の不断の実践の蓄積にまでさかのぼるものでなくてはならない。われわれはそこに Doerr 教授らの苦心を見るばかりでなく、長いヨーロッパの人体病理学の伝統の力をも見るのである。そして読者は、1枚のさりげない図に即しても、その背景にふかく秘められているものをまさに熟視することを要するのであろう。

この図譜の内容的な特色は、肉眼所見と組織学的所見、ことに弱拡大の組織所見を対応せしめ、後者の印象を明確ならしめるため特殊染色を

たくみに駆使している点にある。それにより根本の趣旨が病理学各論の理解におかれているのであり、いわゆる外科病理図譜とはおのずから重点を異にする。すなわち、Doerr 教授の先師 R. Rössle と K. Apitz が 1940年に出版した病理学図譜が想起されるが、それに比べ肉眼像組織像ともに豊富であり、個々の図版も大きく (8×11.0 cm)、収録された病変や疾患も多彩である。図版の構図、色彩、鮮鋭度もまず最高にちかい。しいていえば肉眼写真の一部のものの色彩が必ずしも万全でない。しかし色彩についても原著者がすこぶる意を用いていることはその記述からもうかがわれ、当面これ以上を求めることを過大とすべきかも知れない。

以上の次第で、地道に病理学を学ぼうとする学生および若い研究者にこの図譜を座右に置くことをすすめる。但し、残念ながら38,000円という値段は少し高い。また邦訳に当られた慶応大学病理学教室の労を多とするが、翻訳紹介は本意ではあるまい。是非オリジナルなよき図譜を世におくられることを私は当然のこととして期待する。

A4変型/頁338/原色図959/1976/
¥38,000/¥600 (医学書院刊)